

reticulato-elevatis. Nom. Jap. Hime-kuromoji (m.)

Hab. Japonia media et austro-occidentalis; Prov. Suruga Umegashima (TM); Prov. Tôtômi mt. Akiwa (T); Prov. Mikawa Minamishitaragôri mt. Hongûsan (in locis umbrôsis sylvarum, K. Torii et Y. Momiyama, 19 Jun. 1951, fr.-typus in Herb. Fac. Sc. Univ. Tôkyo et M), Chichiiwagawa (TM); Prov. Ise Ôsugidani (TK); Prov. Yamoto mt. Ôdaigahara (TK), mt. Miwayama (T); Prov. Kawachi mt. Iwawakiyama (K); Prov. Kii mt. Kôyasan (T), mt. Toragamine (T. fl. 合) Nishimurogôri Higashitondamura (T); Prov. Awatsi (T); Prov. Awa Kaifugôri Shishikuimura (T), Nagagôri Tairiuiyama (K); Prov. Ôsumi mt. Kirishima (MK); Prov. Hiuga mt. Shiratoriyama (K), Wanidsukayama (K); Prov. Hizen mt. Unzen (K).

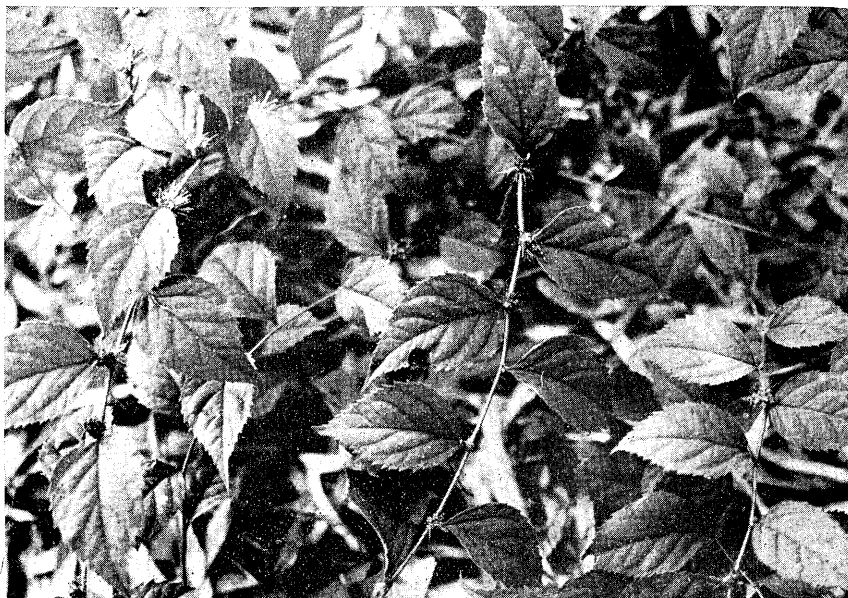
(Signorum Explicatio: (T)=Herb. Fac. Sc. Univ. Tokyo; (M)=Herb Nat. Hist. Mus. Tokyo; (K)=Herb. Fac. Sc. Univ. Kyoto.).

○スズカケソウの自生地 (室 源一) Gen'ichi MURO; The native land of *Calorhabdos villosa* Makino.

岐阜県不波郡府中村中宇屋敷 2213~2214 の1及び2番地に自生する。右は小竹義明氏の所有地に属する、マダケの藪で、2畝6歩ある。

昭和4年岐阜県武儀中学校に勤労当時、夏休みに郷里府中に帰り、附近に採集にて見出し、スズカケソウとして標本を所持していた。後に岐阜立多治見工業学校の塩田健藏氏が見られ、確かに自生していたかと質問された後、非常に珍しいものであることを漏されたので驚いた。昭和7年大垣工業学校の波磨実太郎氏が研究を重ねられ、此の植物が外国は勿論、日本に於ても上記以外に自生を見ない珍種とされ、保存しなければならぬことを力説されたが、何等策も講ぜられぬまま現在に及んでいる。

この竹藪の中にはヤブツバキ、アオキ、チャ、ナンテン、ウコギ、フジ、サンシヨウ、ビナンカヅラ、キヅタ、シユロ、ムクノキ、テイカカヅラ、スイカヅラ、ノブドウ等の木本の他、草としてミヨウガ、ヌスビトハギ、フキ、イノコヅチ、ミツバ、ヤブラン、ミヅヒキ、ハダロソウ、ヨメナ、ウバユリ、ヤブガラシ、ドクダミ、ヤブコウジ、ミヤマカタバミ、アカネ、タチツボスミレ、チヂミザサ、セントウソウ、アオツヅラフジ、ハイドクソウ、イブキシダ、イノデ、ヤブソテツ等がはえている。スズカケソウはこれ等の雑草に混つてはえているのである、莖は組長く多くは枝分れせず、長いものは1米に及び、上部は蔓状を呈して雑草に蔽いかかり、先端は地につき、そこから根を出して新植物を生じ、母株と連続したまま生育して無性的に盛に繁殖する。冬は地上部は枯死し、翌春根元に近い莖から新しい芽を出して生育する、花期は8月1日頃が最盛であり濃紫色の花をつける。以上の生態から附近広範囲に分布しているように推察されるが、



スズカケソウ *Calorhabdos villosa* Makino

現在の所他に自生地はみいだされていない。尙例年夏になると藪の下草を刈取るためか年々減少していく様に感じている。(岐阜県立不破高等学校)

附記 (山崎 敬) Takashi YAMAZAKI: *Additional note*

スズカケソウは飲沼慾斎の作った標本が国立科学博物館に蔵されており、その立派な図が草本図説にのせられているなど、本草学者にはよく知られていたものらしいにもかかわらず、自生地は勿論、生品さえ容易にみられなかつた。明治29年、牧野先生が生品にもとずいて新種の記載をされて以後も、実物に接した人は皆無であつたし、標本すらも殆んど存在していなかつたものである。昭和7年波磨氏によつて自生地の発見が公にされたことは上記のとうりであるが、その研究が配布範囲の狭い地方誌にしか発表されなかつたため、昭和10年大井博士が植物分類地理に書かれた簡単な記事以外には、詳細なことは一般に知られず、波磨氏の死去と共に不明になつてしまつた。最近岐阜薬大の原田利一氏や武田製薬の富樫誠氏などの努力により、再び自生地が明らかにされ、発見者の室氏も健在であることがわかつたのは喜ばしい。

生育地でスズカケソウが特に保護されているような形跡はなく、全くの野生状態である。この竹藪から2米位の道をへだてて同じ様な竹藪があるが、そこにはスズカケソウは全くみられない。これはスズカケソウの繁殖が種子よりも幼苗によることと関係する